

# 惨禍の記憶を胸に

## 本県遺族代表・高橋さん

# 「平和続いてほしい」

# 父の笑顔浮かべ献花

あの日を振り返り、過ぎた年月を思った。広島に原爆が投下されて70年。県内の被爆者は故郷広島を訪れ、あるいは遠く県内から故郷に思いをよせ、原爆で命を奪われた家族を悼んだ。広島市で平和記念式典が行われた同じ時、県内では平和への思いを込めた鐘の音が鳴り響いた。「二度と繰り返さないように」。悲しみは終わらず、平和への願いは強くなる。穏やかな世界が、永遠に続いてほしい。広島で、県内で、全ての被爆者を追悼する鎮魂の祈りが広がった。

とちぎ  
戦後70年  
広島から

下野市の高橋久子さん(82)は、本県遺族代表として平和記念式典に臨んだ。4年ぶりの参列。子煩悩だった父親の思い出をたどりながら、「今の平和がずっと続いてほしい」とあらためて祈った。70年前の「あの日」、12歳だった高橋さんは爆心地から約2キロ離れた場所ですら、父親の岩佐節造さん(横松敏史撮影)



亡くなった父親が勤めていた広島銀行で、慰霊碑に献花する高橋さん=6日午前、広島市、横松敏史撮影

ん「当時(51)は爆心地近くの広島銀行に勤務。高

橋さんは9日後に、父親の死を知った。骨片と印鑑だけが残った。式典後、高橋さんは原爆ドームを訪ねた。「昔の広島県産業奨励館で、よく父に連れていってもらった場所。らせん階段があつて、そこで遊びました」。広島銀行にも足を運んだ。屋上にある慰霊碑に献花し、手を合わせた。「70年たっても、父の顔は変わ

らない」。高橋さんは、よく抱っこしてくれた父の笑顔を思い浮かべた。平和について考えてほしいと、高橋さんは現在、本県で中学生らに被爆体験を伝えている。「(父は)『頑張っているな』と言ってくれているな」と思っています。高橋さんは、再び慰霊碑に手を合わせた。(横松敏史)